

離散数理工学 (2025 年度後学期)

第 12 回

高次元 (6) : 距離とボロノイ図

岡本 吉央 (電気通信大学)

okamotoy@uec.ac.jp

2026 年 1 月 27 日

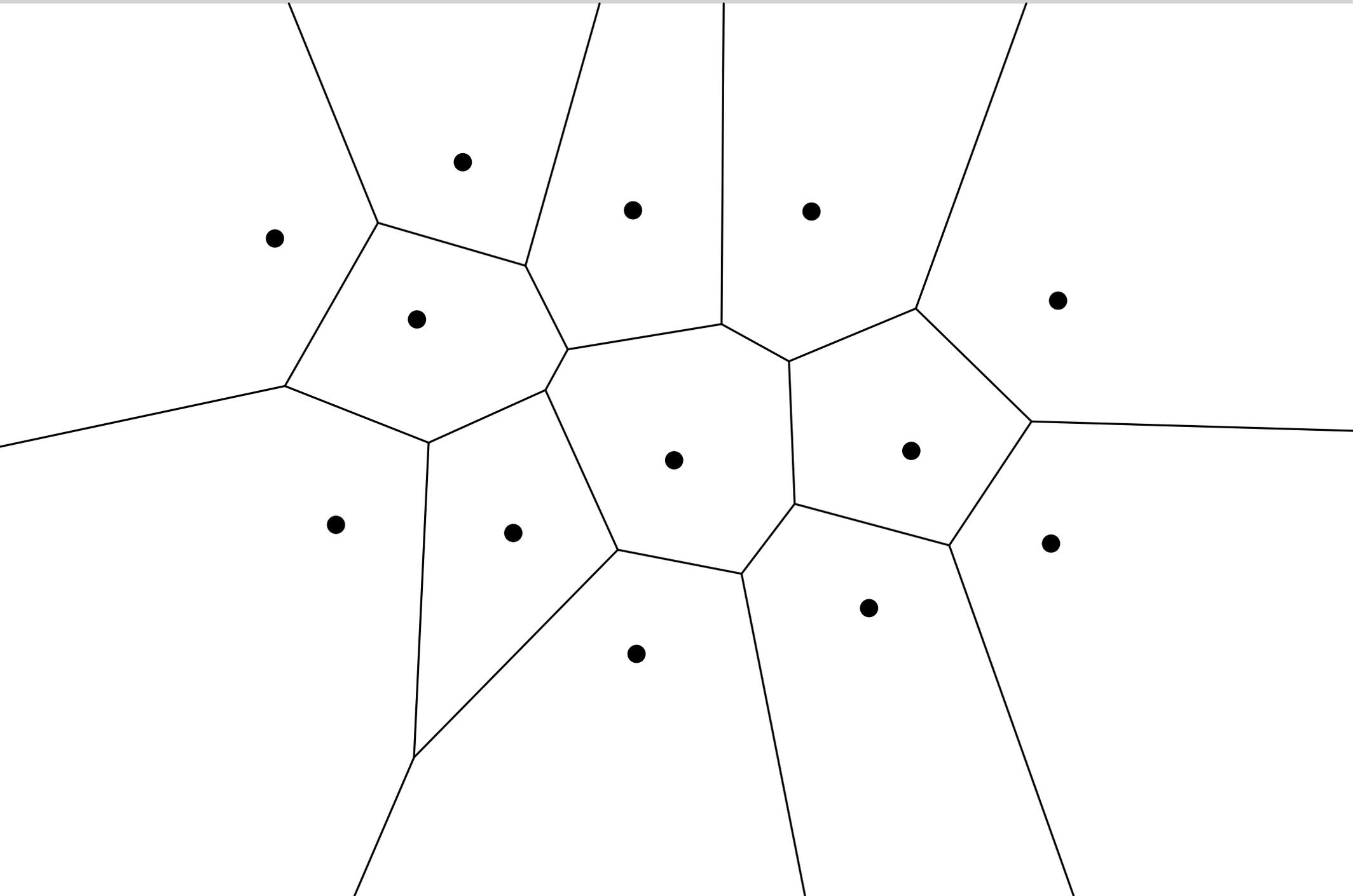
最終更新 : 2026 年 1 月 18 日 18:15

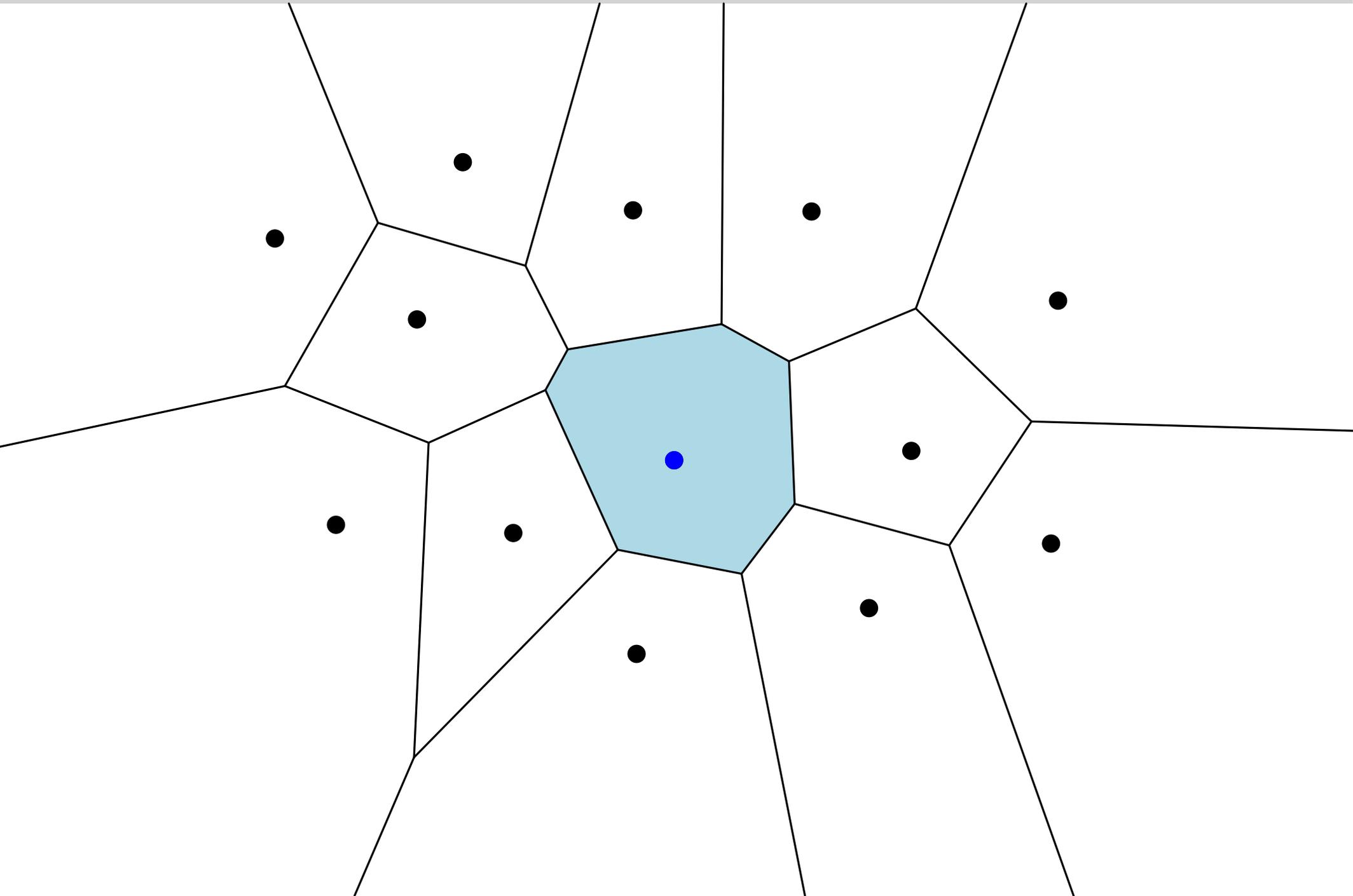
1. ボロノイ図を上側エンベロープとして捉えられるようになる
2. さまざまな距離と凸集合を関係づけられるようになる

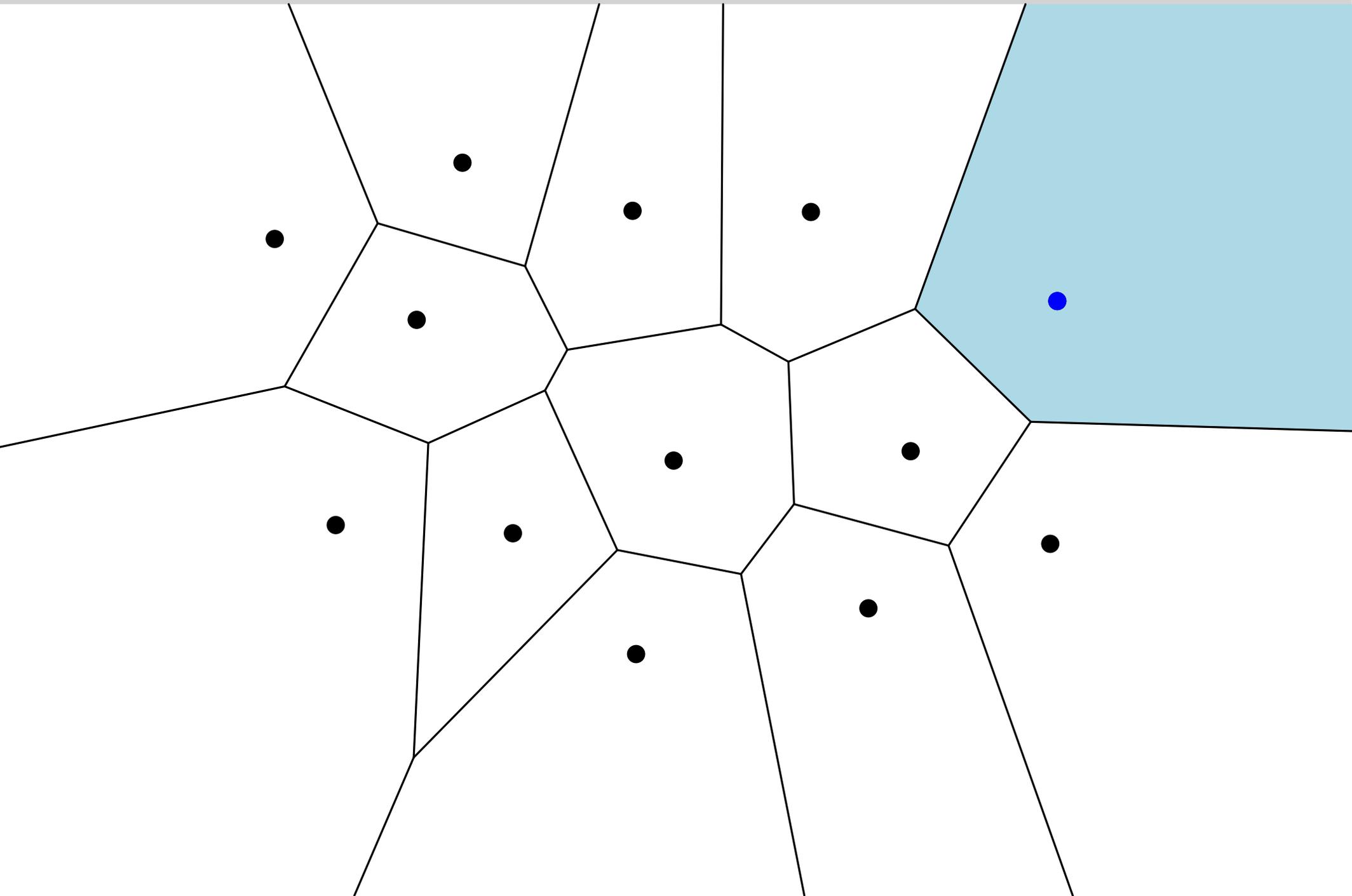
教訓

次元を上げたり，概念を抽象化することで見通しがよくなることもある

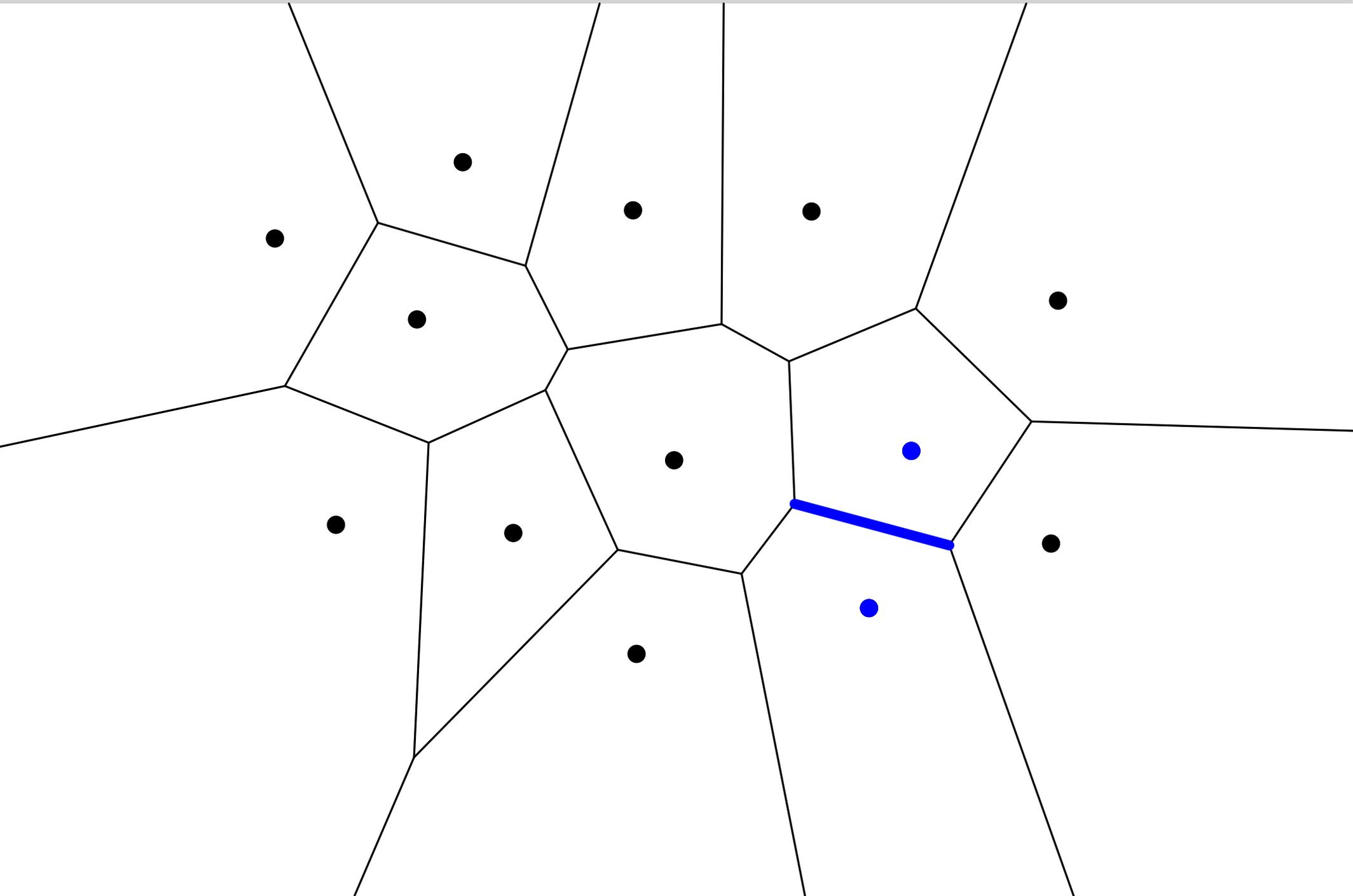
1. **ボロノイ図と上側エンベロープ**
2. 距離と凸集合

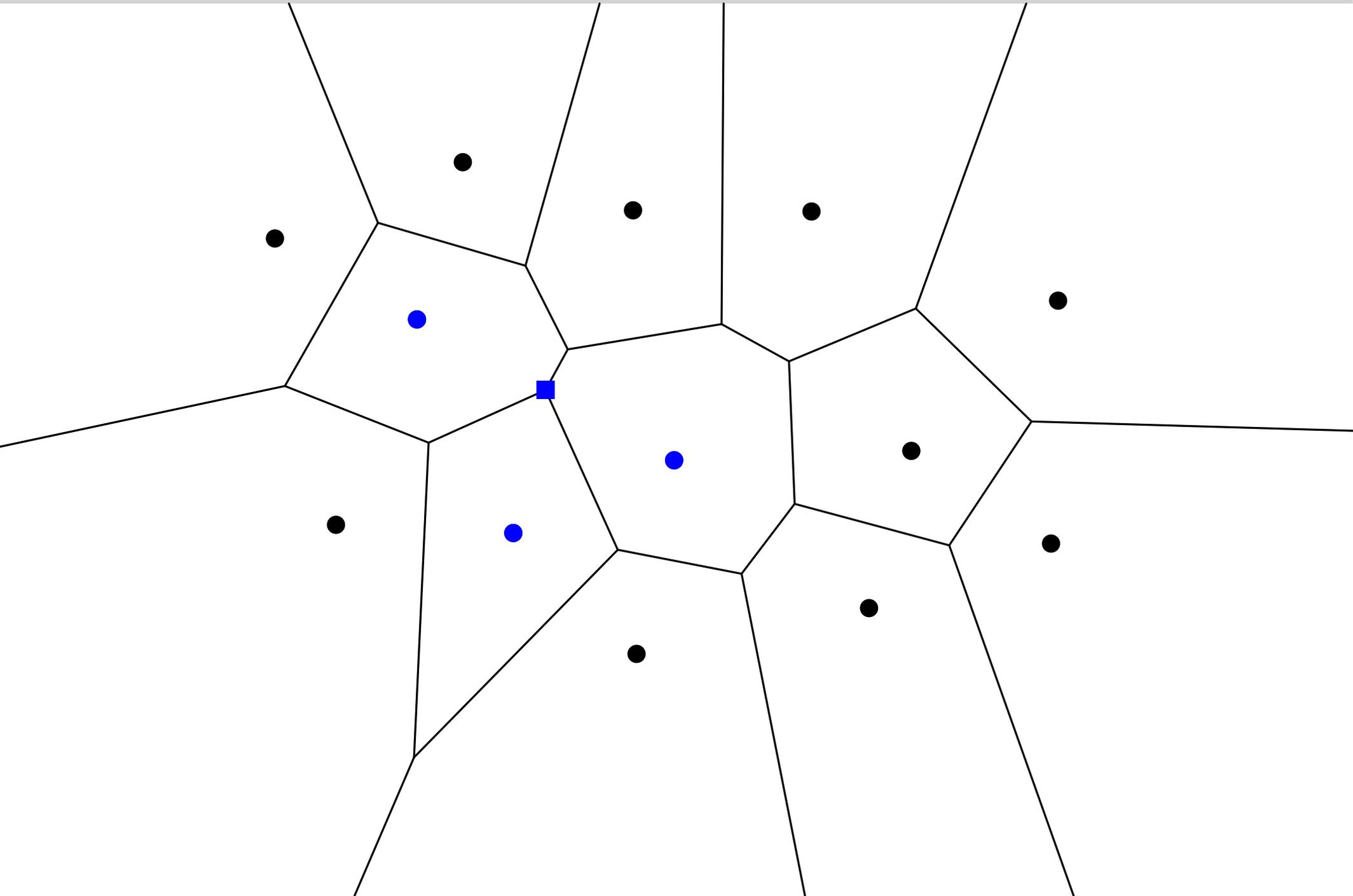


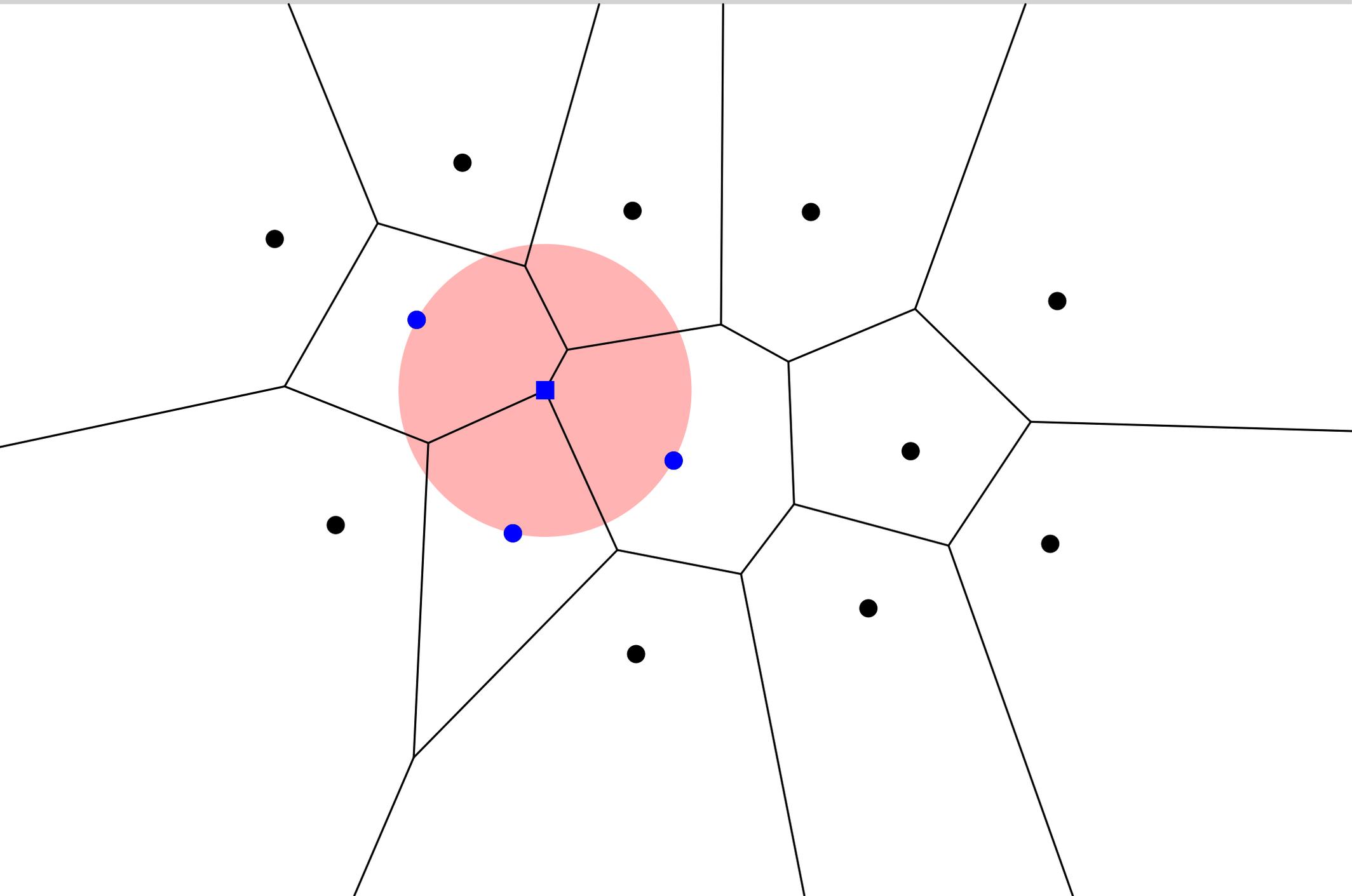


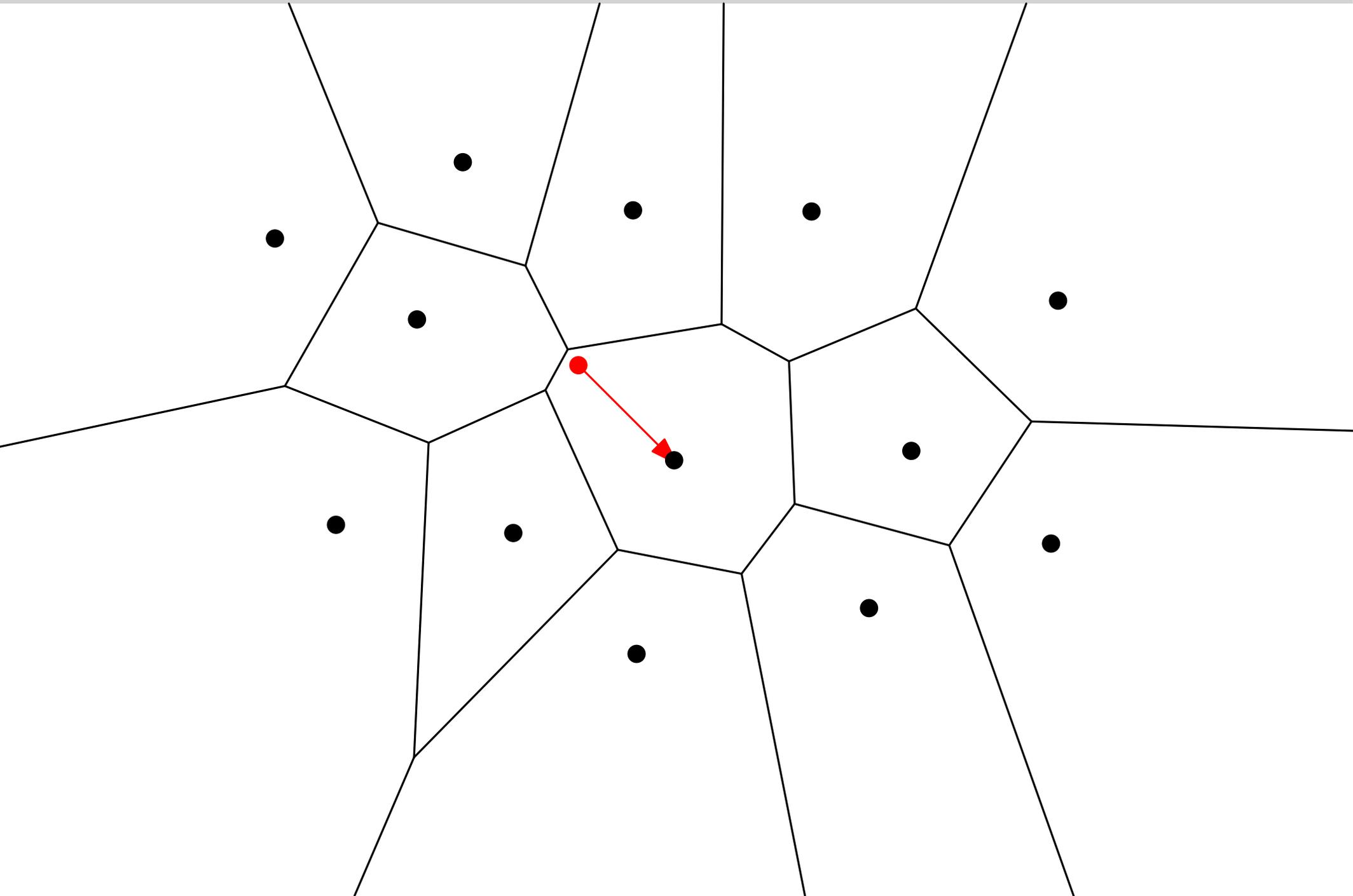


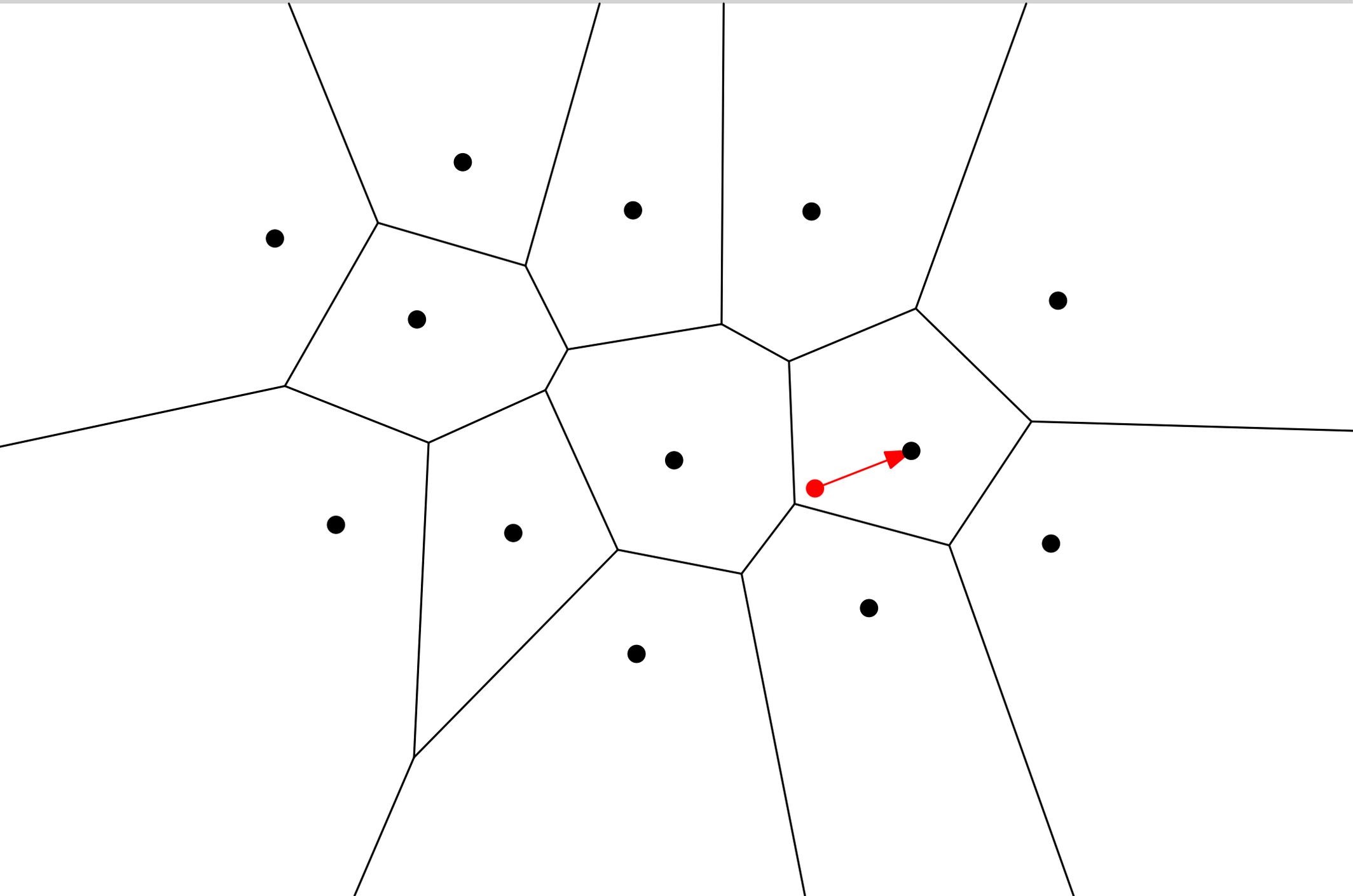
[復習] ボロノイ図：例











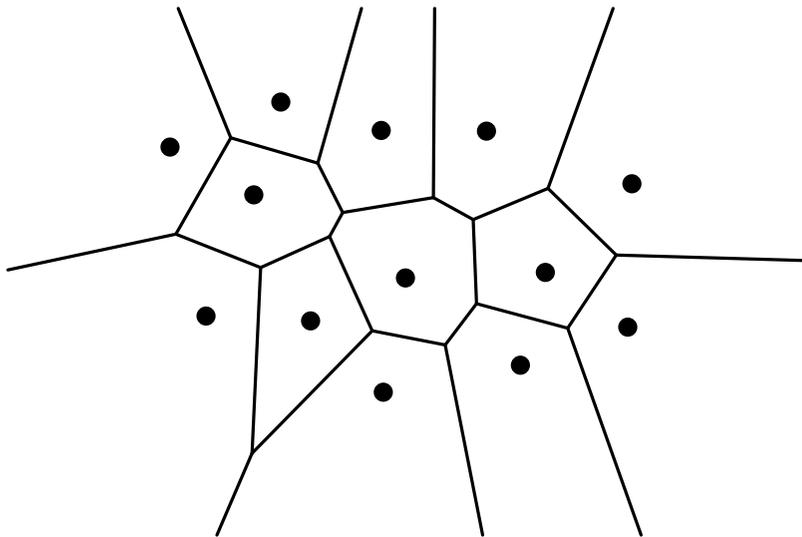
有限点集合 $P \subseteq \mathbb{R}^d$

定義：ボロノイ図

P の **ボロノイ図** とは, 次の図形 $V(p)$ による \mathbb{R}^d の分割

$$V(p) = \left\{ q \in \mathbb{R}^d \mid \begin{array}{l} p \text{ と } q \text{ の距離} \leq r \text{ と } q \text{ の距離} \\ \forall r \in P - \{p\} \end{array} \right\}$$

ただし, $p \in P$



各点 $p \in P$ を **母点** や **サイト** と呼ぶことがある

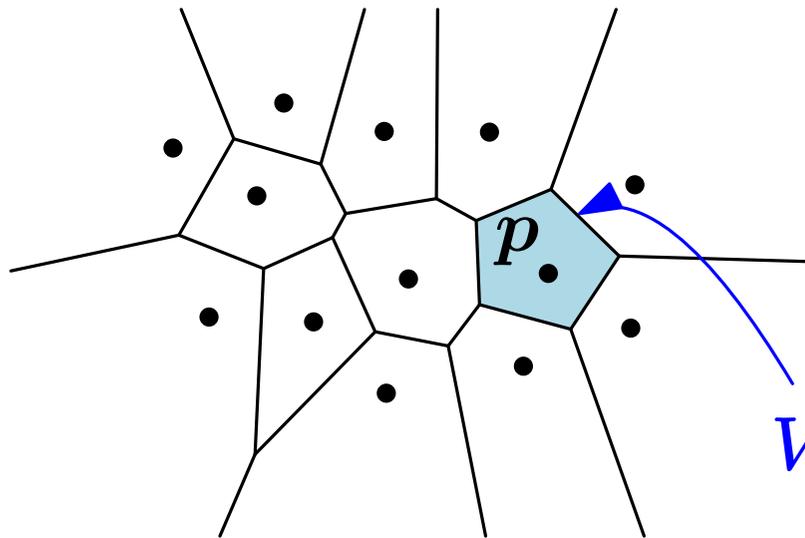
有限点集合 $P \subseteq \mathbb{R}^d$

定義：ボロノイ図

P の **ボロノイ図** とは, 次の図形 $V(p)$ による \mathbb{R}^d の分割

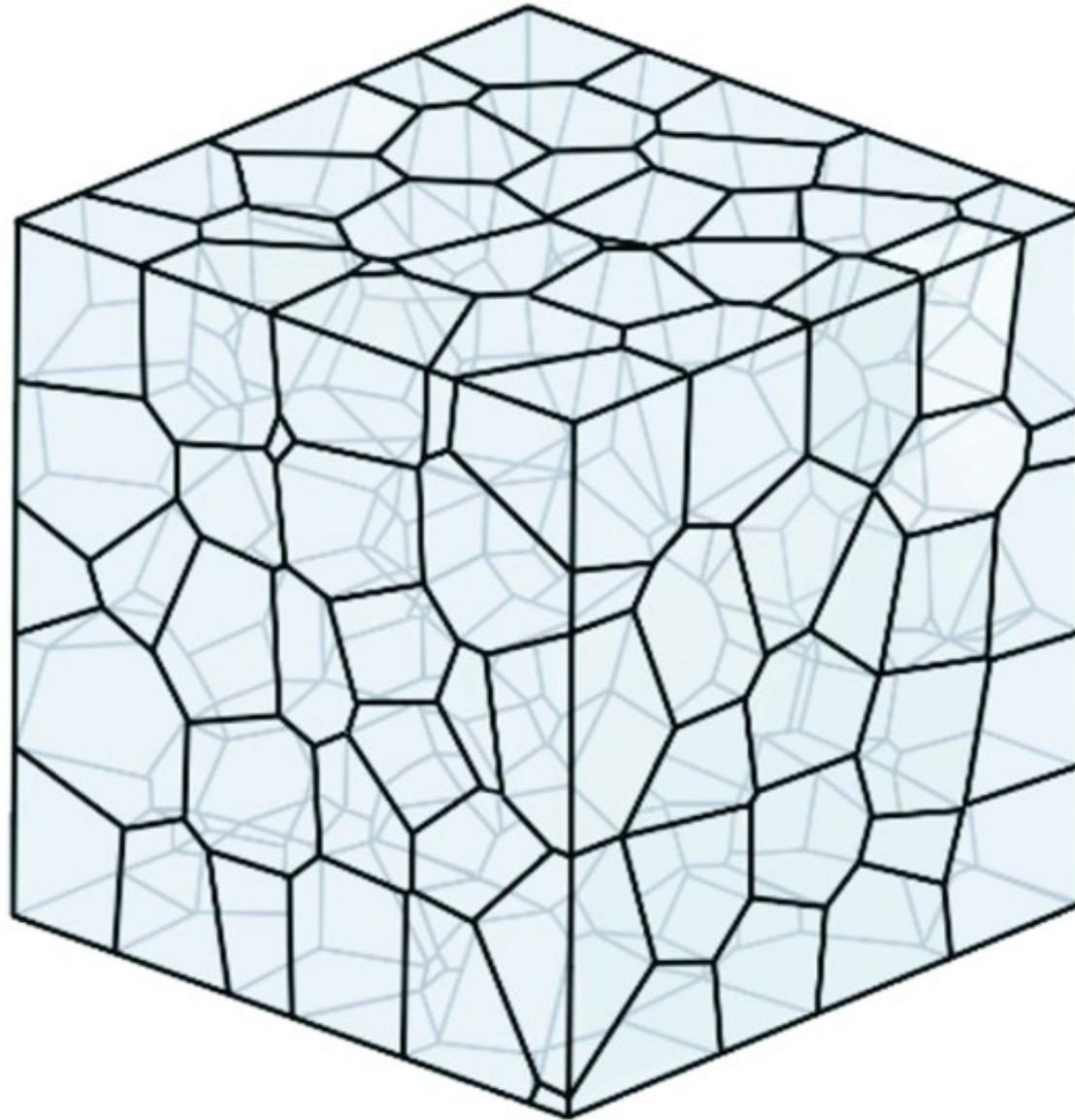
$$V(p) = \left\{ q \in \mathbb{R}^d \mid \begin{array}{l} p \text{ と } q \text{ の距離} \leq r \text{ と } q \text{ の距離} \\ \forall r \in P - \{p\} \end{array} \right\}$$

ただし, $p \in P$



各点 $p \in P$ を **母点** や **サイト** と呼ぶことがある

$V(p)$ ← p の **ボロノイ領域**



(Cheng, Liu, Liu, Cao '22)

今回の前半

- ユークリッド距離 を扱う

今回の後半

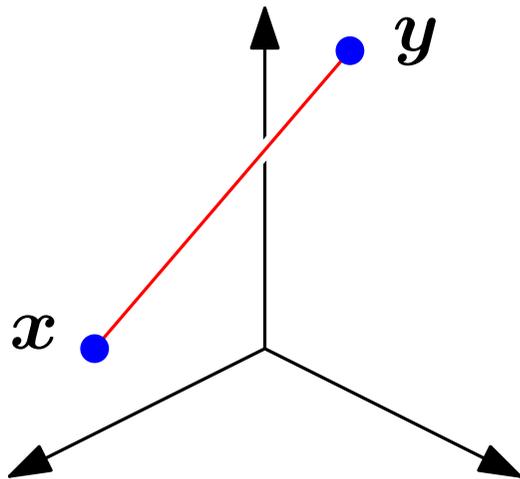
- その他の距離 を扱う

点 $x, y \in \mathbb{R}^d$

定義：ユークリッド距離

点 x と y の **ユークリッド距離** とは、次の量のこと

$$\sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2}$$



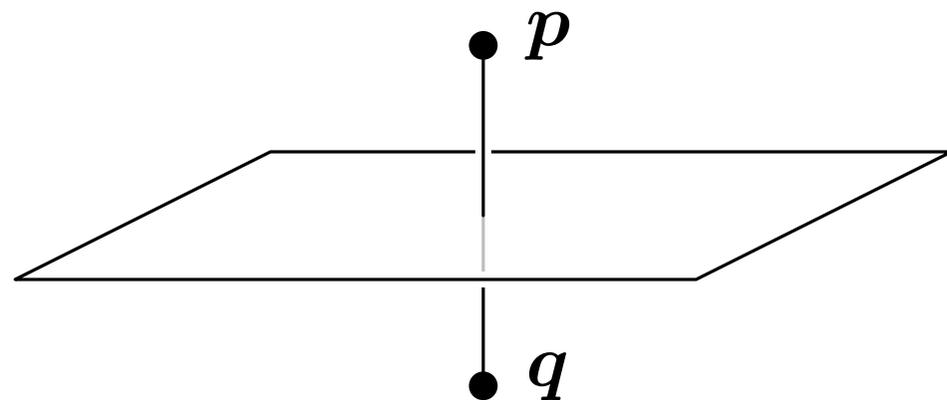
x が p と q の等距離面上にある

$$\Leftrightarrow \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - p_i)^2} = \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - q_i)^2}$$

$$\Leftrightarrow \sum_{i=1}^d (x_i^2 - 2x_i p_i + p_i^2) = \sum_{i=1}^d (x_i^2 - 2x_i q_i + q_i^2)$$

$$\Leftrightarrow \sum_{i=1}^d (2(q_i - p_i))x_i + \sum_{i=1}^d (p_i^2 - q_i^2) = 0$$

\mathbb{R}^d における超平面を表す



性質：ボロノイ領域は凸多面集合

ボロノイ領域は凸多面集合

- 特に，有界であれば，凸多面体

証明： p のボロノイ領域 $V(p)$ は次のように書ける

$$V(p) = \bigcap_{q \in P - \{p\}} \left\{ x \mid \sum_{i=1}^d (2(q_i - p_i))x_i + \sum_{i=1}^d (p_i^2 - q_i^2) \leq 0 \right\}$$

これは，有限個の閉半空間の共通部分なので，凸多面集合

□

有限点集合 $P \subseteq \mathbb{R}^d$

定義：ボロノイ図の面

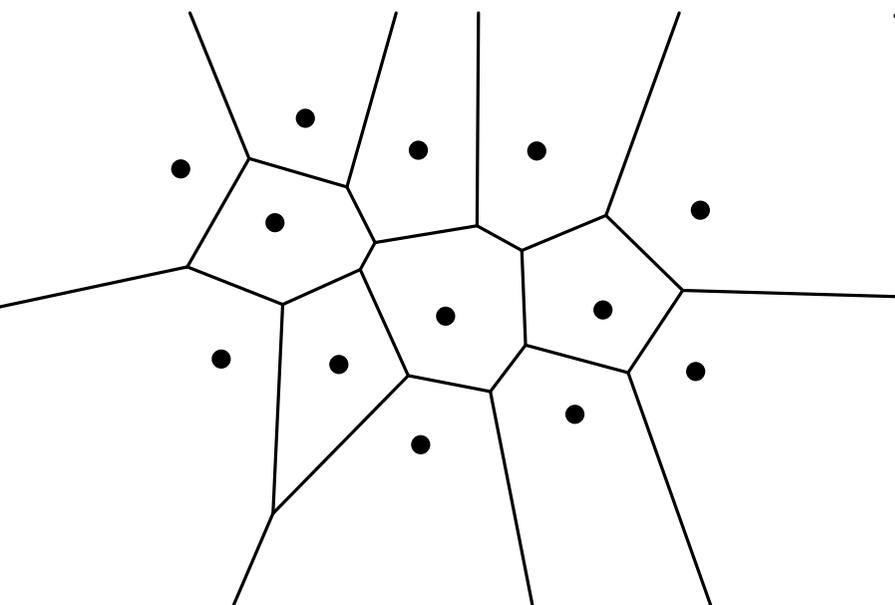
P のボロノイ図の **面** とは, $Q \subseteq P$ に対して,

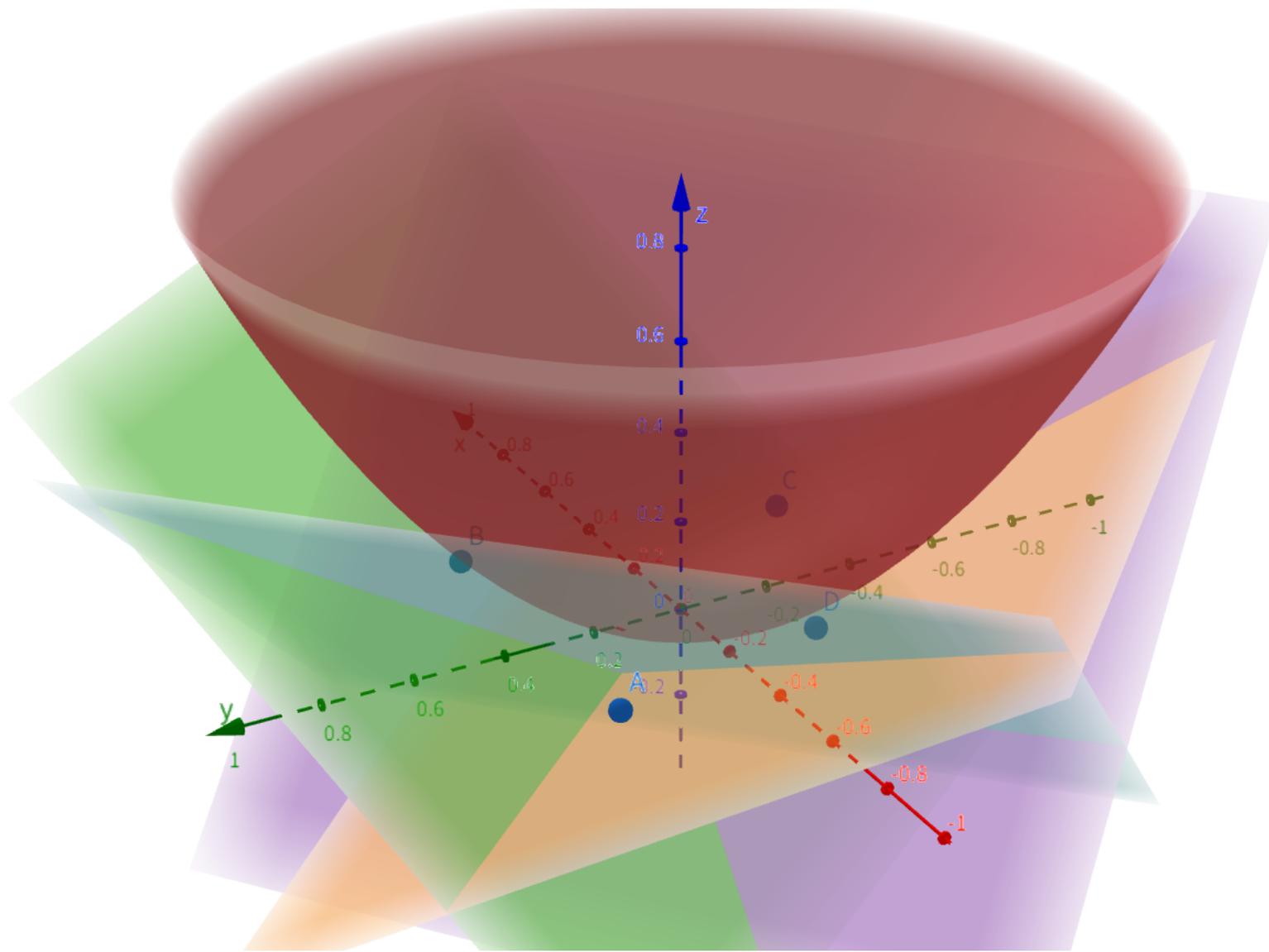
$$\bigcap_{q \in Q} V(q)$$

と書ける非空の集合

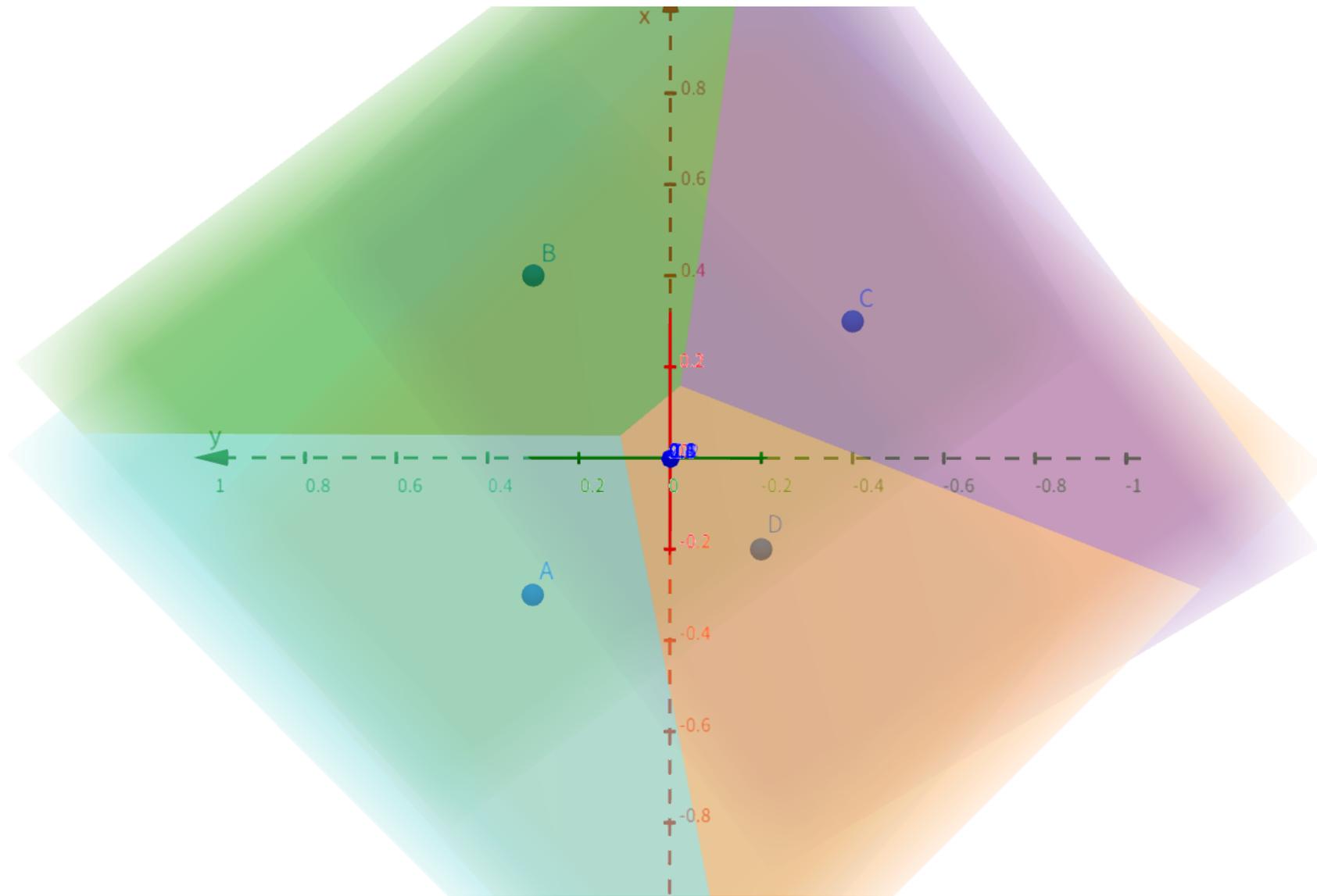
性質：ボロノイ図の面は凸多面集合

- ボロノイ頂点：0次元面
- ボロノイ辺：1次元面
- ボロノイ領域(胞)： d 次元面



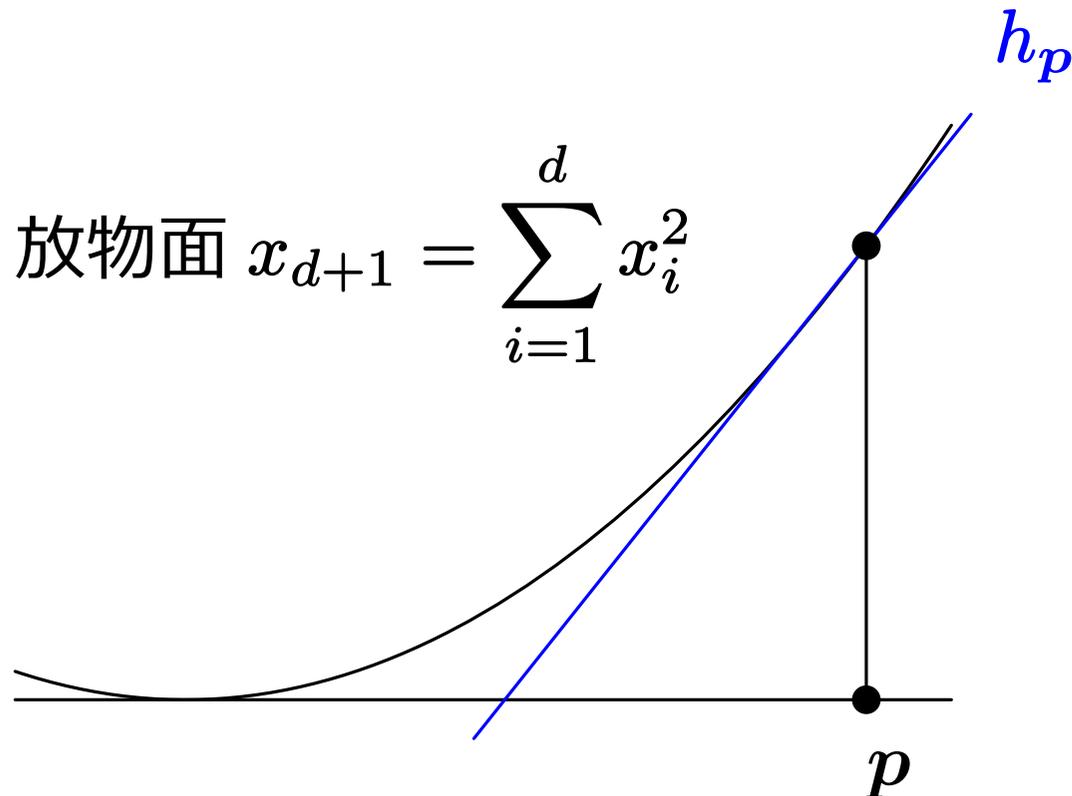


ボロノイ図と上側エンベロープ：例 (続) 13/44



点 $p = (p_1, p_2, \dots, p_d) \in \mathbb{R}^d$

↓
超平面 $h_p = \left\{ x \in \mathbb{R}^{d+1} \mid x_{d+1} = \sum_{i=1}^d (2p_i x_i - p_i^2) \right\}$

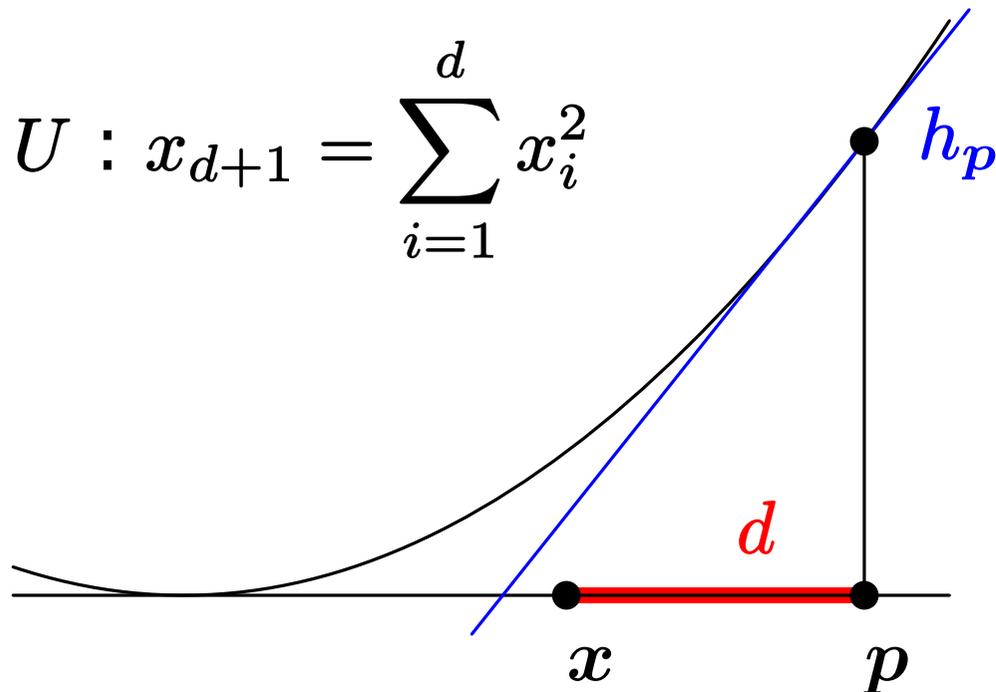


点 $p \in \mathbb{R}^d$, 超平面 $h_p = \{x \mid x_{d+1} = \sum(2p_i x_i - p_i^2)\}$
放物面 $U = \{x \mid x_{d+1} = \sum x_i^2\}$

性質：ユークリッド距離と放物面

$d =$ 点 $x \in \mathbb{R}^d$ と p の距離 \Rightarrow

$d^2 = U$ と h_p の x における x_{d+1} 方向の距離

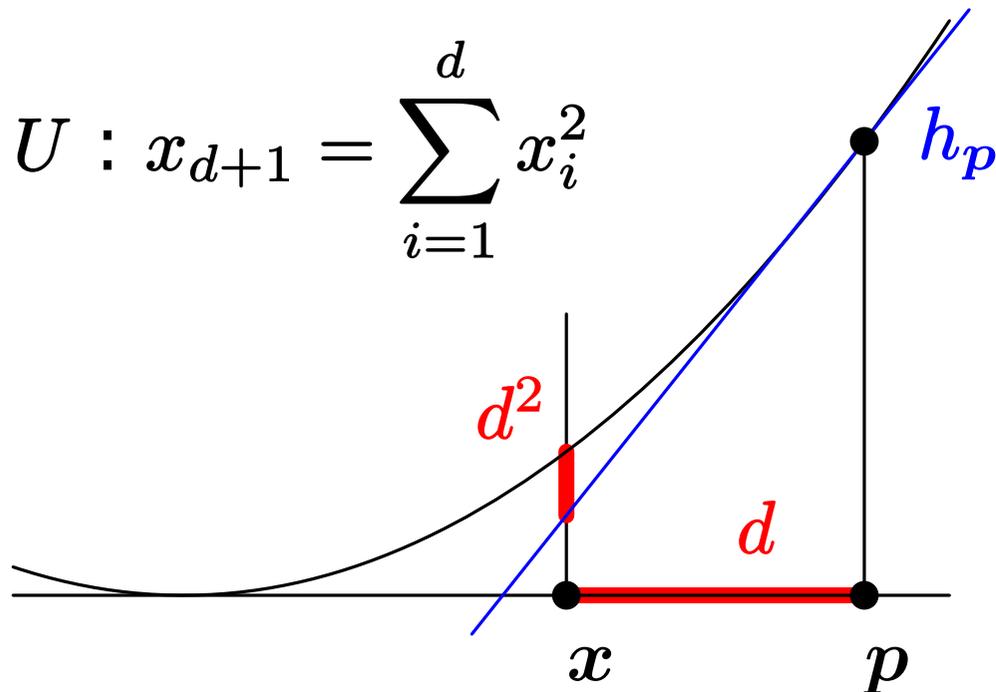


点 $p \in \mathbb{R}^d$, 超平面 $h_p = \{x \mid x_{d+1} = \sum(2p_i x_i - p_i^2)\}$
放物面 $U = \{x \mid x_{d+1} = \sum x_i^2\}$

性質：ユークリッド距離と放物面

$d =$ 点 $x \in \mathbb{R}^d$ と p の距離 \Rightarrow

$d^2 = U$ と h_p の x における x_{d+1} 方向の距離

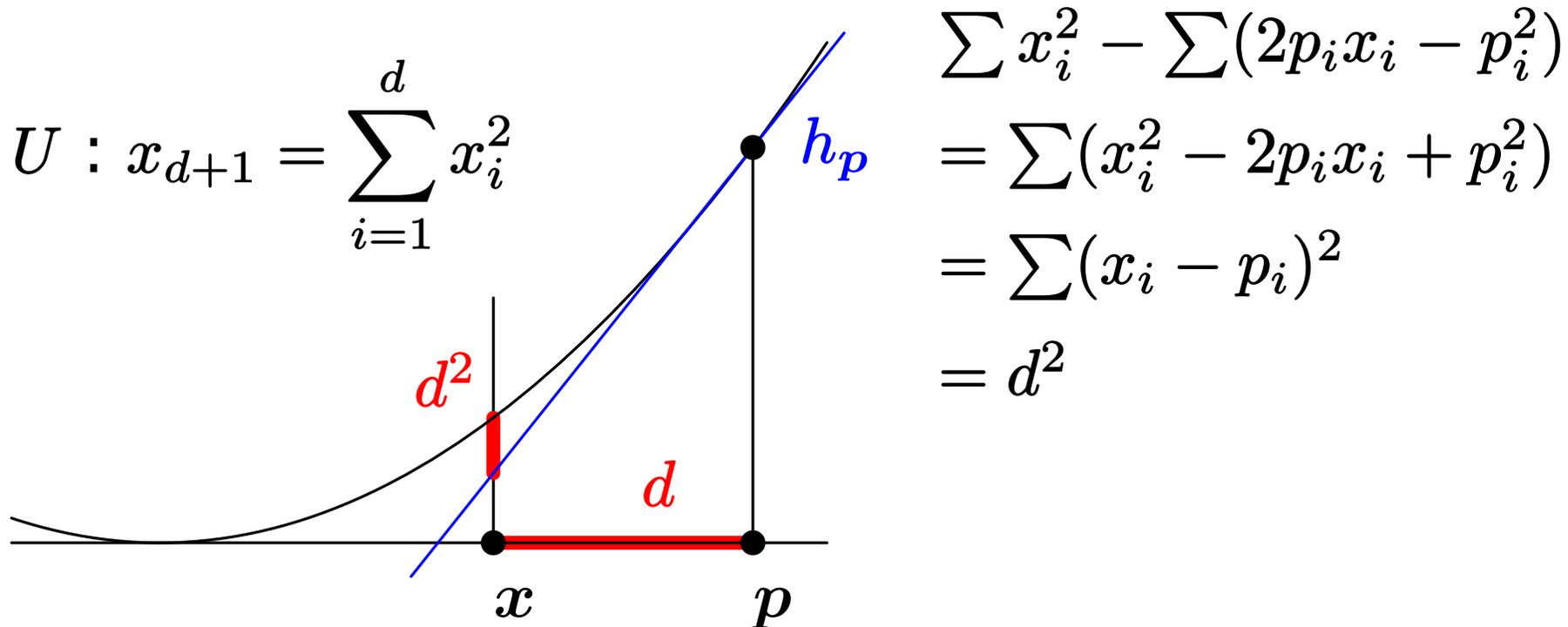


点 $p \in \mathbb{R}^d$, 超平面 $h_p = \{x \mid x_{d+1} = \sum(2p_i x_i - p_i^2)\}$
 放物面 $U = \{x \mid x_{d+1} = \sum x_i^2\}$

性質：ユークリッド距離と放物面

$d =$ 点 $x \in \mathbb{R}^d$ と p の距離 \Rightarrow

$d^2 = U$ と h_p の x における x_{d+1} 方向の距離

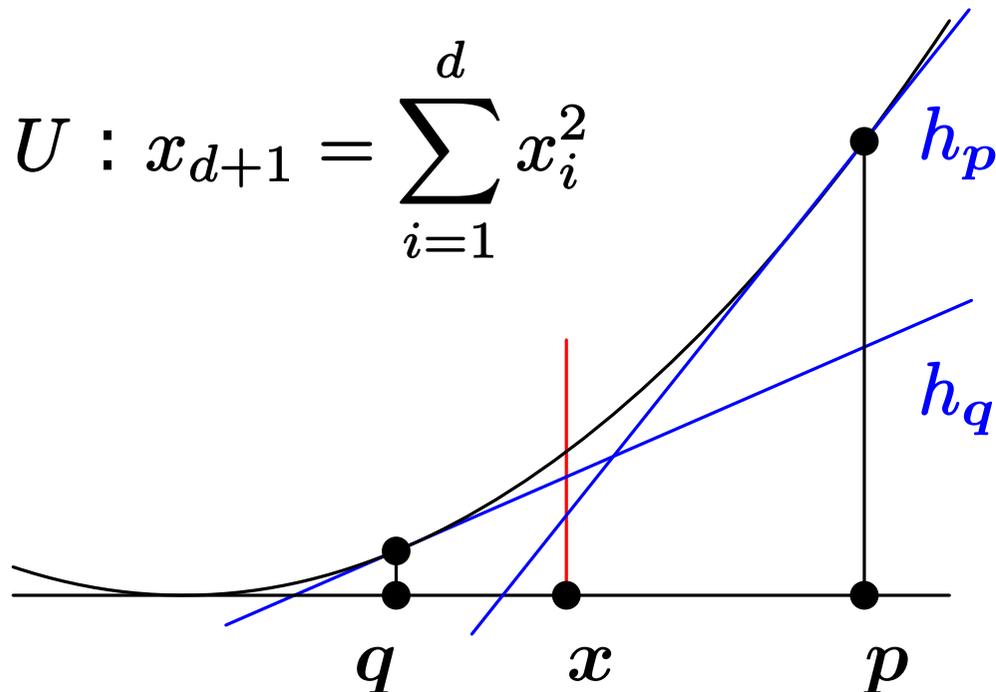


点 $p \in \mathbb{R}^d$, 超平面 $h_p = \{x \mid x_{d+1} = \sum(2p_i x_i - p_i^2)\}$
 放物面 $U = \{x \mid x_{d+1} = \sum x_i^2\}$

性質：ユークリッド距離と放物面

$d =$ 点 $x \in \mathbb{R}^d$ と p の距離 \Rightarrow

$d^2 = U$ と h_p の x における x_{d+1} 方向の距離

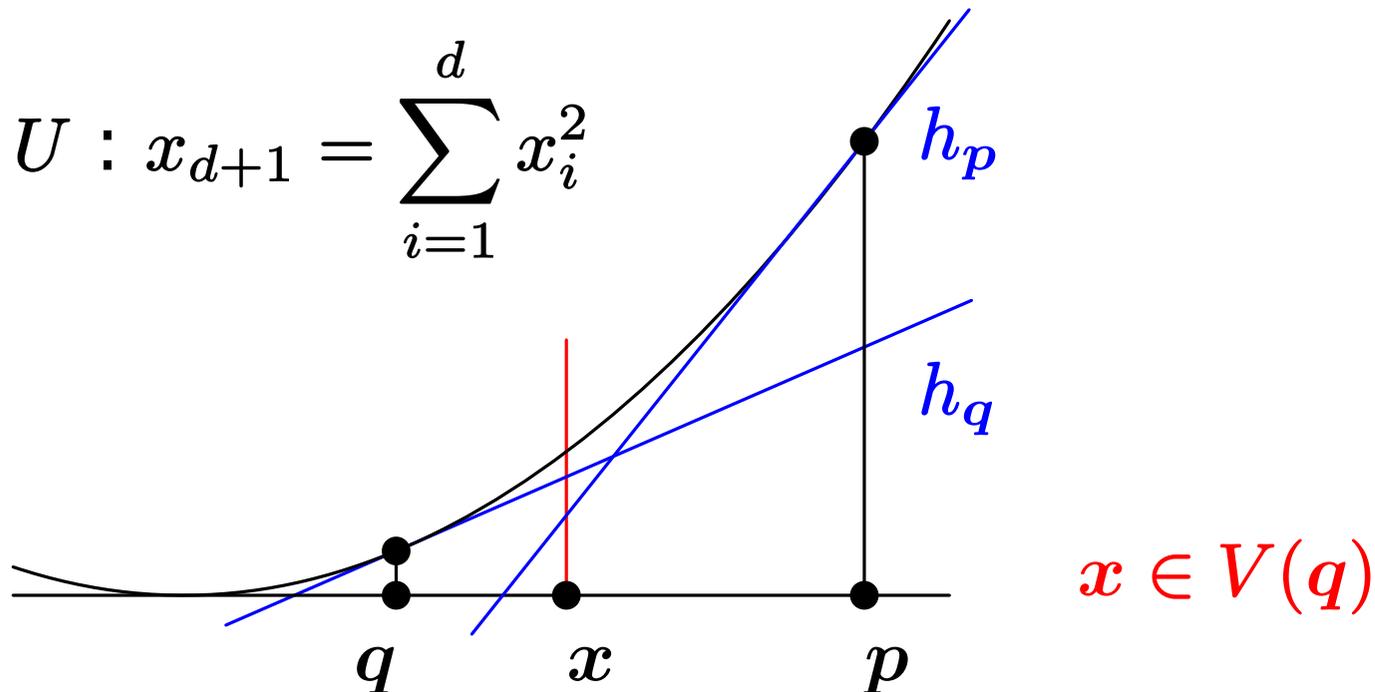


点 $p \in \mathbb{R}^d$, 超平面 $h_p = \{x \mid x_{d+1} = \sum(2p_i x_i - p_i^2)\}$
 放物面 $U = \{x \mid x_{d+1} = \sum x_i^2\}$

性質：ユークリッド距離と放物面

$d =$ 点 $x \in \mathbb{R}^d$ と p の距離 \Rightarrow

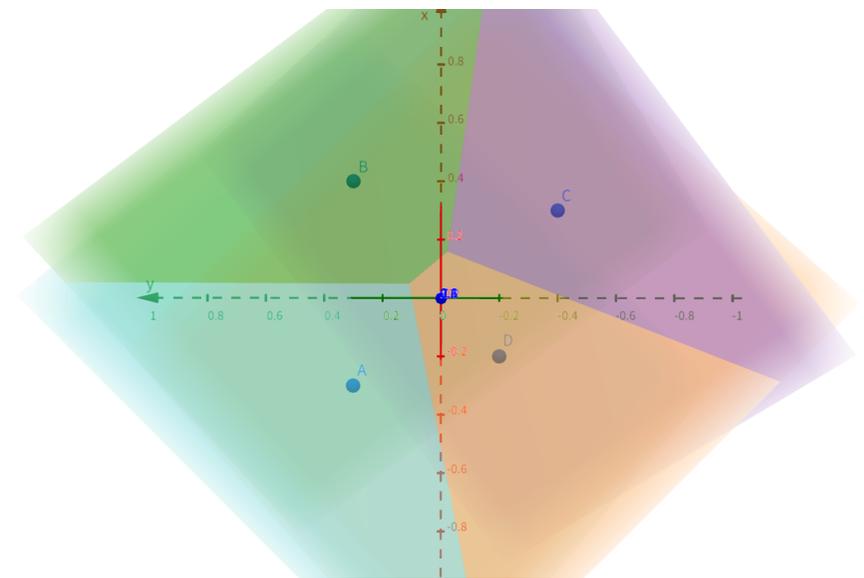
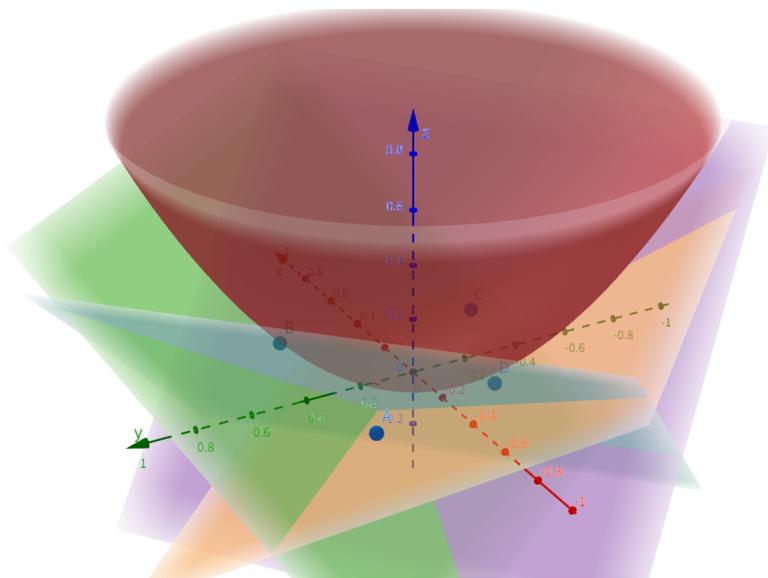
$d^2 = U$ と h_p の x における x_{d+1} 方向の距離



前のページの議論から，次の性質が得られる

性質：ボロノイ図と上側エンベロープ

有限点集合 P のボロノイ図は
超平面配置 $\mathcal{A} = \{h_p \mid p \in P\}$ の上側エンベロープから
得られる



双対変換を通して，凸包の計算に帰着される

1. ボロノイ図と上側エンベロープ
2. **距離と凸集合**

いままでの話

距離として次を扱った

- ユークリッド距離 (2次元, d 次元)
- マンハッタン距離 (2次元)

ここからの話

一般的に「距離」を扱う

- 距離の公理を導入する

距離と凸集合の関係を見る

- そこからさまざまな距離を得る

ユークリッド距離の性質 (1) : 非退化性

$x, y \in \mathbb{R}^d$ に対して

$$\sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2} = 0 \quad \Leftrightarrow \quad x = y$$

ユークリッド距離の性質 (2) : 対称性

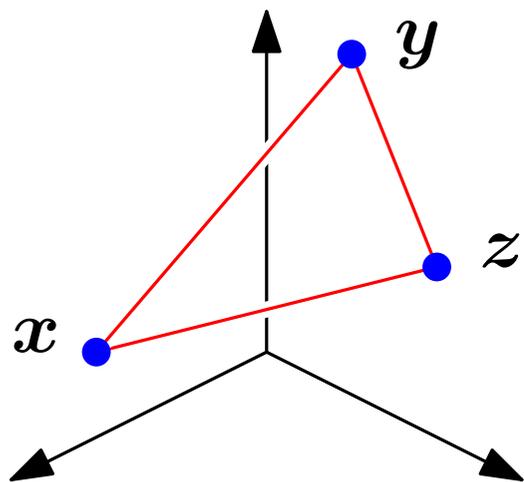
$x, y \in \mathbb{R}^d$ に対して

$$\sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2} = \sqrt{\sum_{i=1}^d (y_i - x_i)^2}$$

ユークリッド距離の性質 (3) : 三角不等式

$x, y, z \in \mathbb{R}^d$ に対して

$$\sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2} \leq \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - z_i)^2} + \sqrt{\sum_{i=1}^d (z_i - y_i)^2}$$



一般的に、次を満たす関数 μ の値を距離と呼ぶことにする

定義：距離

関数 $\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ が次を満たすとき
 μ を **距離関数** と呼ぶ

- **非退化性** : $\mu(x, y) = 0 \Leftrightarrow x = y$
- **対称性** : $\mu(x, y) = \mu(y, x)$
- **三角不等式** : $\mu(x, y) \leq \mu(x, z) + \mu(z, y)$

注意 : $\mu(x, y) \geq 0$ (演習問題)

距離の公理

- ユークリッド距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2}$$

- マンハッタン距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^d |x_i - y_i|$$

- L_p 距離 ($p \geq 1$, 整数でなくてもよい)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \left(\sum_{i=1}^d |x_i - y_i|^p \right)^{1/p}$$

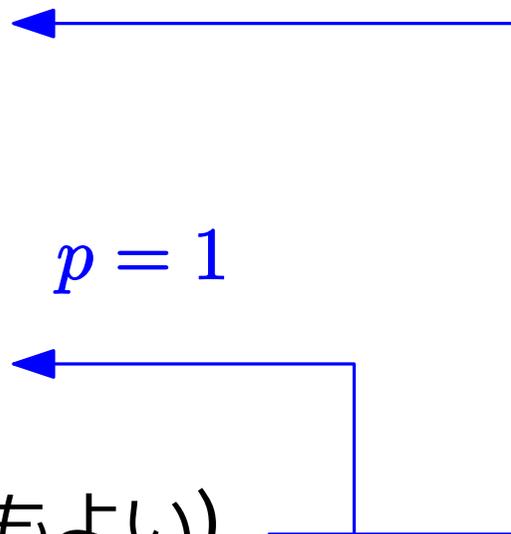
- 楕円距離 ($A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ は対称正定値)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{(\mathbf{x} - \mathbf{y})^T A (\mathbf{x} - \mathbf{y})}$$

- ユークリッド距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2}$$

$p = 2$



- マンハッタン距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^d |x_i - y_i|$$

$p = 1$

- L_p 距離 ($p \geq 1$, 整数でなくてもよい)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \left(\sum_{i=1}^d |x_i - y_i|^p \right)^{1/p}$$

- 楕円距離 ($A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ は対称正定値)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{(\mathbf{x} - \mathbf{y})^T A (\mathbf{x} - \mathbf{y})}$$

- ユークリッド距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2} \quad A = E$$

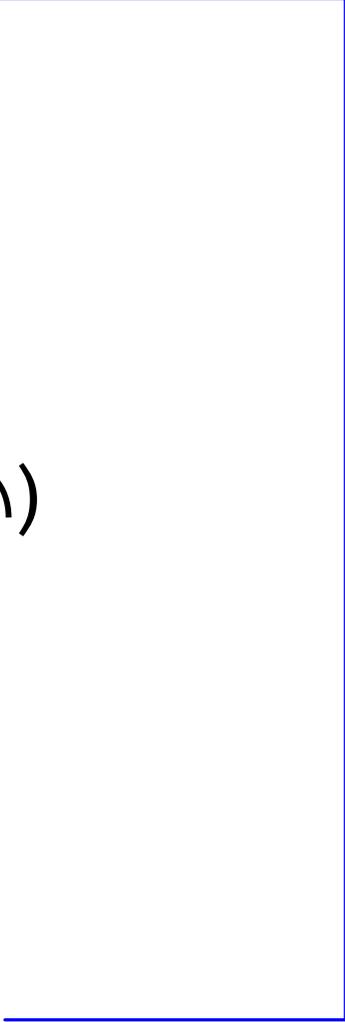

- マンハッタン距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^d |x_i - y_i|$$

- L_p 距離 ($p \geq 1$, 整数でなくてもよい)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \left(\sum_{i=1}^d |x_i - y_i|^p \right)^{1/p}$$

- 楕円距離 ($A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ は対称正定値)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{(\mathbf{x} - \mathbf{y})^T A (\mathbf{x} - \mathbf{y})}$$


- ユークリッド距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2}$$

- マンハッタン距離

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^d |x_i - y_i|$$

- L_p 距離 ($p \geq 1$, 整数でなくてもよい)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \left(\sum_{i=1}^d |x_i - y_i|^p \right)^{1/p}$$

- 楕円距離 ($A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ は対称正定値)

$$\mu(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{(\mathbf{x} - \mathbf{y})^T A (\mathbf{x} - \mathbf{y})}$$

このそれぞれが
非退化性, 対称性,
三角不等式を満たすのを
確認するのは面倒

目標

距離 (ただし, ある条件を満たす)

前のページの例はすべて
この条件を満たす

ノルム

凸集合 (ただし, ある条件を満たす)

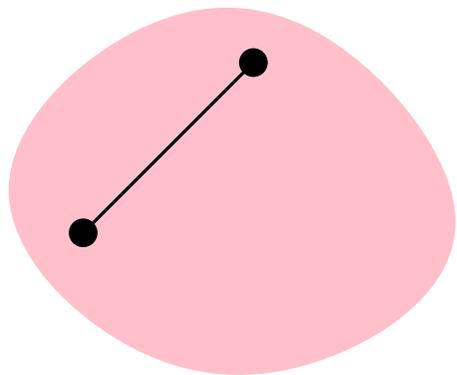
$$X \subseteq \mathbb{R}^d$$

定義：凸集合

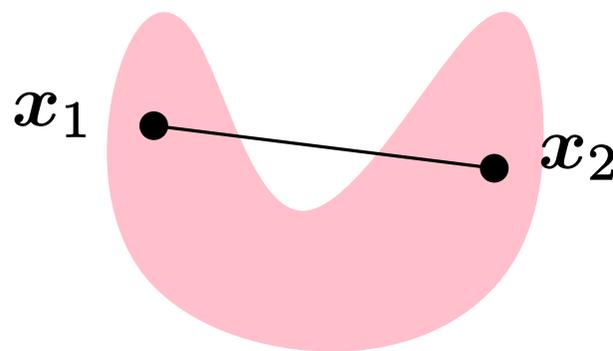
X が **凸集合** であるとは、次を満たすこと

$$x_1, x_2 \in X, \lambda \in [0, 1] \Rightarrow \lambda x_1 + (1 - \lambda)x_2 \in X$$

直感：2点 $\in X \Rightarrow$ その2点を結ぶ線分 $\subseteq X$



凸集合である



凸集合ではない

注：凹集合とは言わない

次を満たす関数 $\|\cdot\|$ (の値) をノルムと呼ぶ

定義：ノルム

関数 $\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ が次を満たすとき
 $\|\cdot\|$ を **ノルム** と呼ぶ

- **独立性** : $\|x\| = 0 \Leftrightarrow x = 0$
- **斉次性** : $\|\alpha x\| = |\alpha| \|x\| \quad (\alpha \in \mathbb{R})$
- **三角不等式** : $\|x + y\| \leq \|x\| + \|y\|$

$\|x\|$ を x のノルムと呼ぶ

特に, 独立性より, $\|0\| = 0$

また, $\|x\| \geq 0$ (演習問題)

ノルムの公理

- ユークリッド・ノルム

$$\|\boldsymbol{x}\|_2 = \sqrt{\sum_{i=1}^d x_i^2}$$

- マンハッタン・ノルム

$$\|\boldsymbol{x}\|_1 = \sum_{i=1}^d |x_i|$$

- L_p ノルム ($p \geq 1$, 整数でなくてもよい)

$$\|\boldsymbol{x}\|_p = \left(\sum_{i=1}^d |x_i|^p \right)^{1/p}$$

- 楕円ノルム ($A \in \mathbb{R}^{d \times d}$ は対称正定値)

$$\|\boldsymbol{x}\|_A = \sqrt{\boldsymbol{x}^T A \boldsymbol{x}}$$

性質：ノルムから距離へ

$\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ をノルムとする, このとき,

$$\mu(x, y) = \|x - y\| \quad \forall x, y \in \mathbb{R}^d$$

とすると, $\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ は距離関数である

例： ユークリッド・ノルム

$$\|x\|_2 = \sqrt{\sum_{i=1}^d x_i^2}$$



ユークリッド距離

$$\mu(x, y) = \sqrt{\sum_{i=1}^d (x_i - y_i)^2}$$

ノルム \rightarrow 距離 : 証明 (1)

28/44

証明 : μ が非退化性, 対称性, 三角不等式を満たすことを示す

証明 : μ が非退化性, 対称性, 三角不等式を満たすことを示す

非退化性 $\mu(x, y) = 0 \Leftrightarrow x = y$

- $x = y$ とすると,
$$\begin{aligned}\mu(x, y) &= \|x - y\| \\ &= \|\mathbf{0}\| \\ &= 0 \quad (\because \text{独立性})\end{aligned}$$

証明 : μ が非退化性, 対称性, 三角不等式を満たすことを示す

非退化性 $\mu(x, y) = 0 \Leftrightarrow x = y$

- $x = y$ とすると, $\mu(x, y) = \|x - y\|$
 $= \|\mathbf{0}\|$
 $= 0$ (\because 独立性)
- $\mu(x, y) = 0$ とすると, $0 = \mu(x, y) = \|x - y\|$
- 独立性より, $x = y$

□

証明 : μ が非退化性, 対称性, 三角不等式を満たすことを示す

対称性 $\mu(x, y) = \mu(y, x)$

- $$\begin{aligned}\mu(x, y) &= \|x - y\| \\ &= \|-(y - x)\| \\ &= |-1| \cdot \|y - x\| \quad (\text{斉次性}) \\ &= \mu(y, x)\end{aligned}$$

□

証明 : μ が非退化性, 対称性, 三角不等式を満たすことを示す

対称性 $\mu(x, y) = \mu(y, x)$

- $$\begin{aligned}\mu(x, y) &= \|x - y\| \\ &= \|-(y - x)\| \\ &= |-1| \cdot \|y - x\| \quad (\text{斉次性}) \\ &= \mu(y, x)\end{aligned}$$

□

三角不等式 $\mu(x, y) \leq \mu(x, z) + \mu(z, y)$

- $$\begin{aligned}\mu(x, y) &= \|x - y\| \\ &= \|(x - z) + (z - y)\| \\ &\leq \|x - z\| + \|z - y\| \quad (\text{三角不等式}) \\ &= \mu(x, z) + \mu(z, y)\end{aligned}$$

□

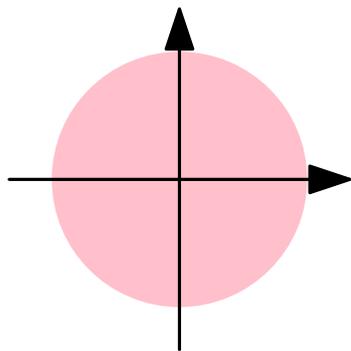
性質：ノルムから凸集合へ

$\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ をノルムとする, このとき,

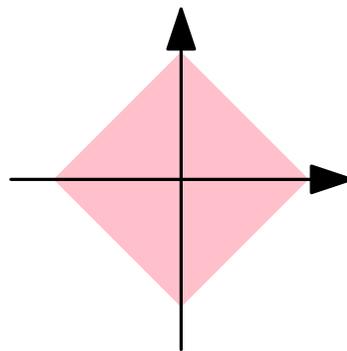
$$B = \{x \in \mathbb{R}^d \mid \|x\| \leq 1\}$$

とすると, B は凸集合

ユークリッド・ノルム



マンハッタン・ノルム

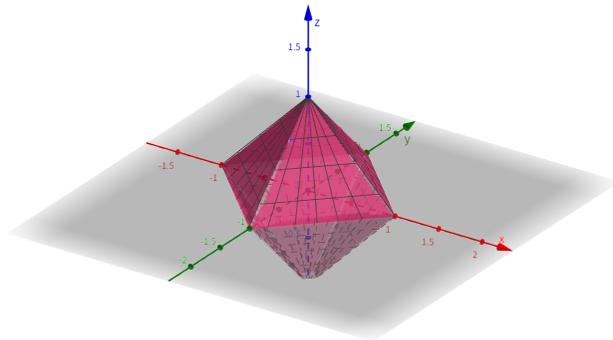


B をノルム $\|\cdot\|$ における単位球体と呼ぶことがある

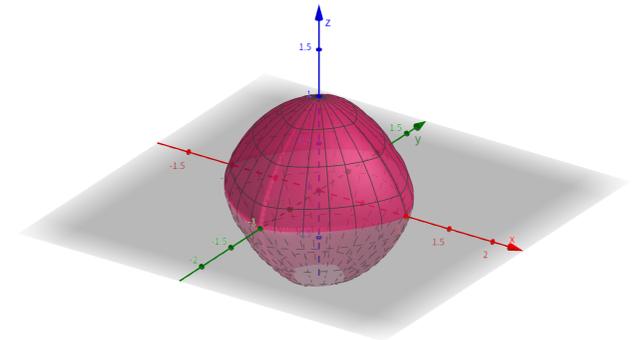
L_p ノルムの単位球体 ($d = 3$ の場合)

$$B = \left\{ x \in \mathbb{R}^d \mid \left(\sum |x_i|^p \right)^{1/p} \leq 1 \right\}$$

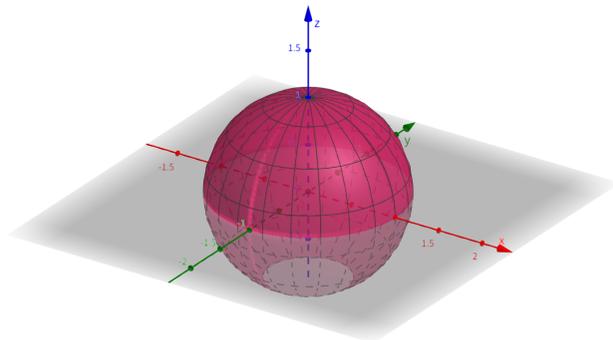
$p = 1$



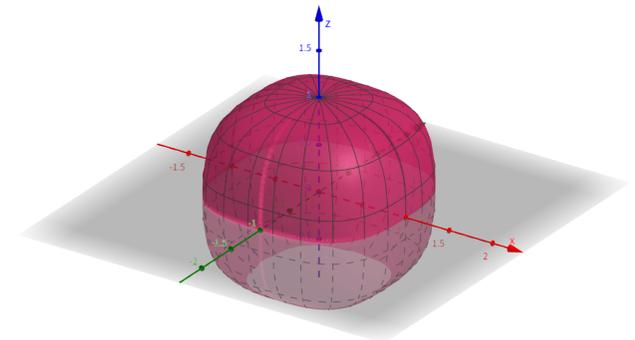
$p = 1.5$



$p = 2$



$p = 3$



証明： $x, y \in B, \lambda \in [0, 1]$ とする (つまり, $\|x\| \leq 1, \|y\| \leq 1$)

- 目標は $\lambda x + (1 - \lambda)y \in B$ を示すこと
- (つまり, $\|\lambda x + (1 - \lambda)y\| \leq 1$ を示すこと)

証明： $x, y \in B, \lambda \in [0, 1]$ とする (つまり, $\|x\| \leq 1, \|y\| \leq 1$)

- 目標は $\lambda x + (1 - \lambda)y \in B$ を示すこと
- (つまり, $\|\lambda x + (1 - \lambda)y\| \leq 1$ を示すこと)

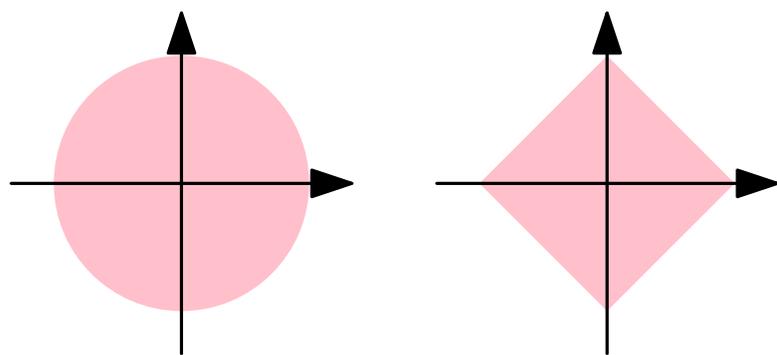
$$\begin{aligned} & \|\lambda x + (1 - \lambda)y\| \\ & \leq \|\lambda x\| + \|(1 - \lambda)y\| && \text{(三角不等式)} \\ & = |\lambda| \cdot \|x\| + |1 - \lambda| \cdot \|y\| && \text{(斉次性)} \\ & = \lambda \cdot \|x\| + (1 - \lambda) \cdot \|y\| && (\lambda \in [0, 1]) \\ & \leq \lambda \cdot 1 + (1 - \lambda) \cdot 1 && (\|x\| \leq 1, \|y\| \leq 1) \\ & = 1 \end{aligned}$$

□

ノルム $\|\cdot\|$ に対して, $B = \{x \in \mathbb{R}^d \mid \|x\| \leq 1\}$

性質：単位球体の性質

1. B は中心対称 $(x \in B \Rightarrow -x \in B)$
2. $\text{lin}(B) = \mathbb{R}^d$
3. B は有界閉集合



「3. B は有界閉集合」の証明は省略 (位相に関する準備が必要)

ノルム $\|\cdot\|$ に対して, $B = \{x \in \mathbb{R}^d \mid \|x\| \leq 1\}$

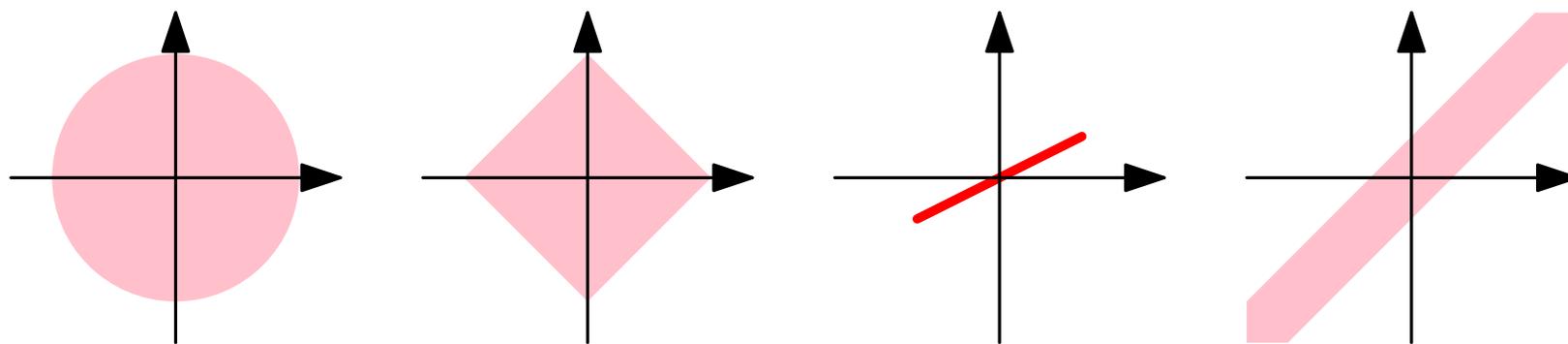
性質：単位球体の性質

1. B は中心対称

$$(x \in B \Rightarrow -x \in B)$$

2. $\text{lin}(B) = \mathbb{R}^d$

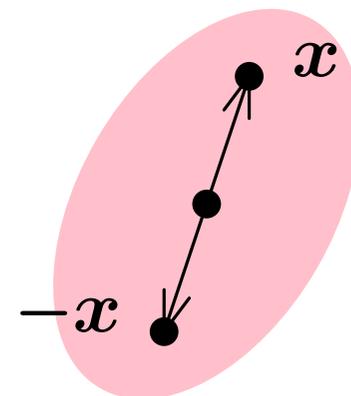
3. B は有界閉集合



「3. B は有界閉集合」の証明は省略 (位相に関する準備が必要)

証明 (中心対称) : $x \in B$ とする (つまり, $\|x\| \leq 1$)

- このとき, $\|-x\| = |-1| \cdot \|x\| = \|x\| \leq 1$
- $\therefore -x \in B$

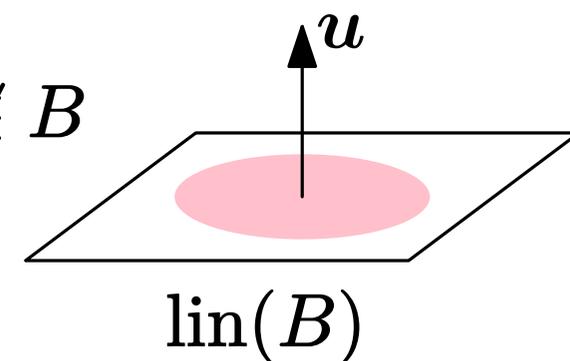


証明 (中心対称) : $x \in B$ とする (つまり, $\|x\| \leq 1$)

- このとき, $\|-x\| = |-1| \cdot \|x\| = \|x\| \leq 1$
- $\therefore -x \in B$

証明 ($\text{lin}(B) = \mathbb{R}^d$) : $\text{lin}(B) \neq \mathbb{R}^d$ と仮定する

- $u \notin \text{lin}(B)$ を任意にとる
- このとき, 任意の $t \neq 0$ に対して, $tu \notin B$
- \therefore 任意の $t \neq 0$ に対して, $\|tu\| > 1$



- $\alpha = \|u\| > 1$ とする
- このとき, $1 < \|\frac{1}{\alpha}u\| = |\frac{1}{\alpha}| \cdot \|u\| = 1$ となり, 矛盾 \square

距離関数 $\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (非退化性, 対称性, 三角不等式)



ノルム $\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (独立性, 斉次性, 三角不等式)



凸集合 $B = \{x \in \mathbb{R}^d \mid \|x\| \leq 1\}$

(中心対称, 全次元, 有界閉)

距離関数 $\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (非退化性, 対称性, 三角不等式)

ノルム $\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (独立性, 斉次性, 三角不等式)

凸集合 $B = \{x \in \mathbb{R}^d \mid \|x\| \leq 1\}$

(中心対称, 全次元, 有界閉)

凸集合 $C \subseteq \mathbb{R}^d$

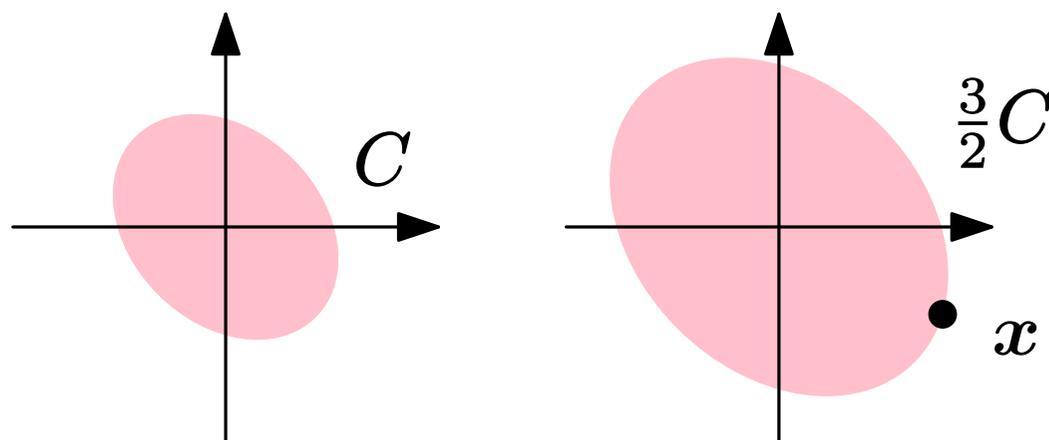
性質：凸集合からノルムへ

C が中心対称, 有界, 閉で $\text{lin}(C) = \mathbb{R}^d$ を満たすとき,

$$\|x\|_C = \min\{t \geq 0 \mid x \in tC\}$$

とすると, 関数 $\|\cdot\|_C: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ はノルムである

ただし, $tC = \{tx \mid x \in C\}$



注意：「有界・閉・ $\text{lin}(C) = \mathbb{R}^d$ 」は \min の存在保証に用いる

証明： $\|\cdot\|_C$ がノルムの条件を満たすことを示す

独立性 $\|x\|_C = 0 \Leftrightarrow x = 0$

- $x = 0$ のとき,

$$\|x\|_C = \min\{t \geq 0 \mid x \in tC\} = 0$$

- $\|x\|_C = 0$ のとき, $x \in 0C = \{0\}$

$$\therefore x = 0$$



証明 : $\|\cdot\|_C$ がノルムの条件を満たすことを示す

斉次性 $\|\alpha x\|_C = |\alpha| \cdot \|x\|_C$ ($\alpha \neq 0$ と仮定してよい)

$$\begin{aligned} \bullet \|\alpha x\|_C &= \min\{t \geq 0 \mid \alpha x \in tC\} && \text{ある } y \in C \text{ に対して,} \\ &= \min\{t \geq 0 \mid x \in \frac{t}{\alpha}C\} && \alpha x = ty \\ &= \min\{t \geq 0 \mid x \in \frac{t}{|\alpha|}C\} && \text{(中心対称性)} \\ &= \min\{|\alpha|s \geq 0 \mid x \in sC\} \\ &= |\alpha| \cdot \min\{s \geq 0 \mid x \in sC\} \\ &= |\alpha| \cdot \|x\|_C \end{aligned}$$

□

証明 : $\|\cdot\|_C$ がノルムの条件を満たすことを示す

三角不等式	$\ x + y\ _C \leq \ x\ _C + \ y\ _C$
-------	--------------------------------------

- $x = 0$ または $y = 0$ のときは簡単 (なぜ?)
- $x, y \neq 0$ で, $\alpha = \|x\|_C, \beta = \|y\|_C$ とする
- このとき, $\therefore \alpha, \beta > 0$ で, $x \in \alpha C, y \in \beta C$
- C が凸なので, $\frac{\alpha}{\alpha + \beta} \cdot \frac{1}{\alpha} x + \frac{\beta}{\alpha + \beta} \cdot \frac{1}{\beta} y \in C$
- $\therefore \|x\|_C + \|y\|_C = \alpha + \beta$
 $\geq \min\{t \geq 0 \mid x + y \in tC\} = \|x + y\|_C$

□

距離関数 $\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (非退化性, 対称性, 三角不等式)

ノルム $\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (独立性, 斉次性, 三角不等式)

凸集合 $B = \{x \in \mathbb{R}^d \mid \|x\| \leq 1\}$
(中心対称, 全次元, 有界閉)

距離関数 $\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (非退化性, 対称性, 三角不等式)

(並進不変性, 斉次性)

ノルム $\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ (独立性, 斉次性, 三角不等式)

凸集合 $B = \{x \in \mathbb{R}^d \mid \|x\| \leq 1\}$

(中心対称, 全次元, 有界閉)

ノルム $\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$

性質：並進不変性・斉次性

$\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$\mu(x, y) = \|x - y\| \quad (x, y \in \mathbb{R}^d)$$

と定義すると, μ は次を満たす

- **並進不変性** : $\mu(x + z, y + z) = \mu(x, y) \quad (z \in \mathbb{R}^d)$
- **斉次性** : $\mu(\alpha x, \alpha y) = |\alpha| \mu(x, y) \quad (\alpha \in \mathbb{R})$

証明 : 演習問題

距離関数 $\mu: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$

性質：距離からノルムへ

関数 $\|\cdot\|: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$\|x\| = \mu(x, \mathbf{0})$$

と定義すると, μ が並進不変性, 斉次性を満たすならば,
 $\|\cdot\|$ はノルムである

証明：演習問題

L_p ノルムの単位球体が凸であることを証明するのに次を使う

性質：ヤングの不等式

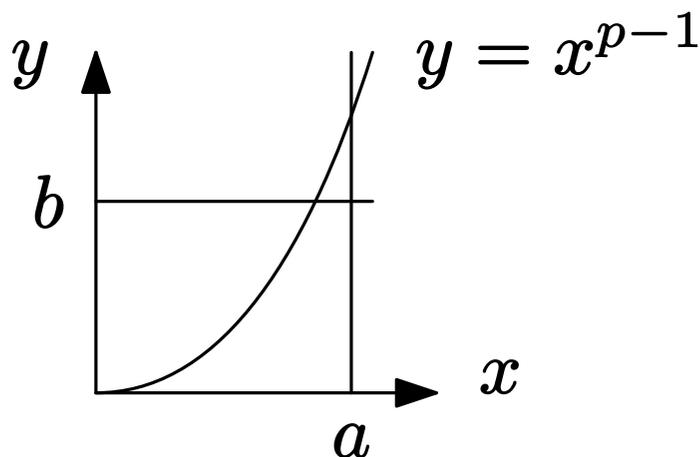
設定

- p, q : $\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$ を満たす 1 以上の実数
- a, b : 非負実数

このとき,

$$ab \leq \frac{a^p}{p} + \frac{b^q}{q}$$

証明のヒント



L_p ノルムの単位球体が凸であることを証明するのに次を使う

性質：ヤングの不等式

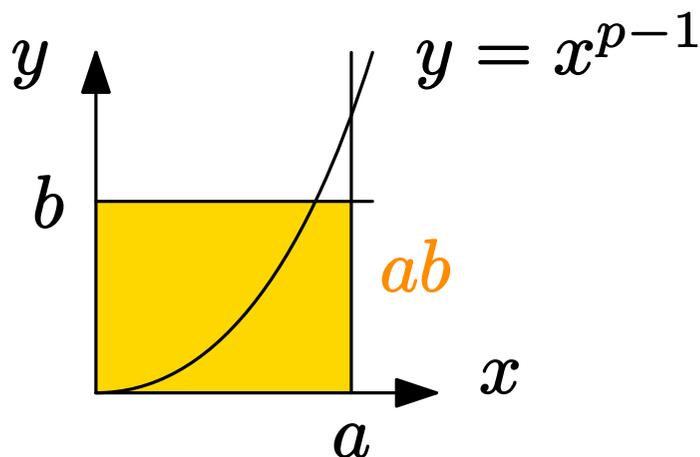
設定

- p, q : $\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$ を満たす 1 以上の実数
- a, b : 非負実数

このとき,

$$ab \leq \frac{a^p}{p} + \frac{b^q}{q}$$

証明のヒント



L_p ノルムの単位球体が凸であることを証明するのに次を使う

性質：ヤングの不等式

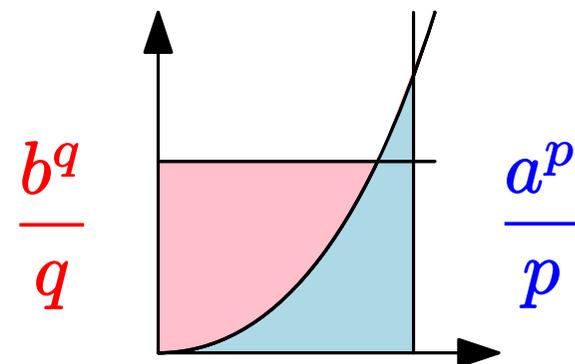
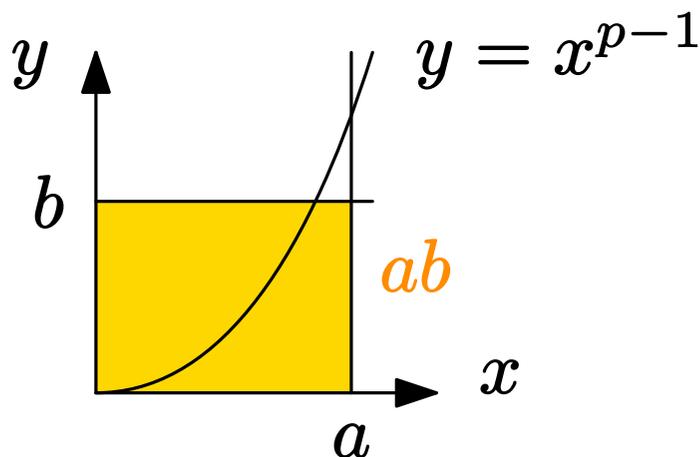
設定

- p, q : $\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$ を満たす 1 以上の実数
- a, b : 非負実数

このとき,

$$ab \leq \frac{a^p}{p} + \frac{b^q}{q}$$

証明のヒント



目標

1. ボロノイ図を上側エンベロップとして捉えられるようになる
 - 重要な技法：放物面による次元の持ち上げ
2. さまざまな距離と凸集合を関係づけられるようになる
 - 重要な概念：ノルム, 距離関数

教訓

次元を上げたり, 概念を抽象化することで
見通しがよくなることもある